



オステリア出土のキリスト教的カット・ガラス浅碗断片

海外最新研究動向

藤井慈子

皆様こんにちは、豊田浩志先生の下で帝政後期のローマ・ガラスの意匠について研究し、課程博士号をいただきました藤井慈子と申します。研究対象がローマ・ガラスであるため、これまで主に海外で調査・発表を行ってきましたが、この度は日本でこのように発表する機会を与えていただき、大変光栄に存じます。

本日注目するオスティアおよびポルトゥス出土の4世紀後半～5世紀のカット・ガラス碗断片



本日は、オスティアおよびポルトゥス出土のガラスについて概観した後、両遺跡から出土したキリスト教的カット・ガラスの断片3点について注目します。それらの点数はごく少なく、断片的ではありますが、近年の発掘成果によりローマの工房で製造された可能性が高いことがわかってきました。また、その図像には (Click!)、キリストの名前の最初の二文字であるキーローを組み合わせたモノグラムを堂々と掲げた、キリスト教公認後にあらわれた新たな図像レパートリーがみられます。すなわち、キリストもしくは当時崇敬を集めた殉教者と思われる、十字架を担ぐ人物像や、キリストと二大使徒ペトロとパウロ

が三人一組となった『律法の授与図』などです。また、同様な主題がカットされたガラス碗の断片の分布を見ることで、ローマで製造されたガラスの流通についても目を向けます。

ルチア・サグイ (Lucia Sagui)

「ヴァチカン・コレクションのポルトゥス出土のカット・ガラスおよび古代末期の図像付きガラスの製造」



MUSEI VATICANI

La Direzione dei Musei Vaticani è lieta di invitarLa alla conferenza

**I VETRI INCISI PORTUENSI NELLE COLLEZIONI VATICANE
E LA PRODUZIONE DEI VETRI FIGURATI
IN ETÀ TARDOANTICA**

PRECEDE
LA PRESENTAZIONE DELLO SCAVO OTTOCENTESCO
E DEL DONO TORLONIA AL MUSEO CRISTIANO

giovedì, 26 ottobre 2017, ore 16:30
SALA CONFERENZE, MUSEI VATICANI

Introduce
BARBARA IATTA, Direttore dei Musei Vaticani

Modera
GUIDO CORNINI, Curatore del Reparto per le Arti Decorative, Musei Vaticani

Intervengono
CLAUDIA LEGA, Assistente del Reparto per le Arti Decorative, Musei Vaticani
LUCIA SAGUI, Sapienza-Università di Roma

Ingresso libero da Viale Vaticano su presentazione
dell'invito dalle ore 16:00 alle ore 16:45

RSVP: eventi.musei@scv.va



3

なお、海外での最新研究成果をご紹介するにあたり、ローマ・サピエンツァ大学のルチア・サグイ教授から直々にご指導をいただく機会を得ました。こちらのイタリア語の案内は、そのサグイ教授が、2017年にヴァチカン博物館所蔵のポルトゥス出土のカット・ガラスについてご講演をなさった時のものです。サグイ先生は、1977年のオスティア遺跡の「泳ぎ手の浴場terme di nuotatore」を皮切りに、ローマ（クリプタ・バルビヤパラティーノの北東斜面）で数々の発掘に参加され、それらの遺跡から出土したガラス製品および陶器の研究で多くの功績を残されてきました。とりわけ本日取り上げる4～5世紀の

カット・ガラス碗の断片を200点以上も発掘され、これから見ていただくとお分かりになるように、角度を変えて何度も確認しないとわかりづらいような、銀化したガラスの表面に浅く施されたカット装飾を描き起こすという、出土品の資料化にも尽力されてきました。

オステアとポルトゥスのガラスおよびガラス製造に関する初の包括的研究

2018年のSagui-Lepriの共同研究

「オステアとポルトゥスにおけるガラスとガラス製造の示唆 “Vetri e indicatori di produzione vetraria a Ostia e a Porto”」



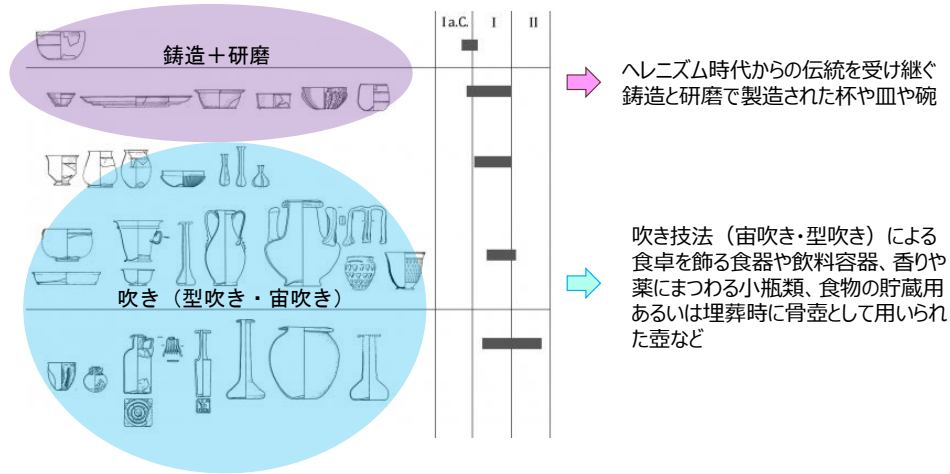
近年のオステア発掘でガラスの出土が報告された箇所

DAI（在ローマドイツ考古学研究所）-AAR（在ローマアメリカアカデミー）による第III、IV、V地域で実施した37回の調査、アウグスブルク大学による市場区画の調査、ローマの英国アカデミーによるポルトゥスの皇帝宮殿の調査で出土したガラス遺物、ならびにオステアの遺物担当であるバオラ・ジェルモーニ博士らが保管・管理するガラス遺物や文書に基づいた紀元前1世紀から紀元後6世紀までの出土ガラスを対象

2018年には、その教え子であるバルバラ・レプリ女史と共に「オステアとポルトゥスにおけるガラス製造とその流通」という論文を発表されました。それは、オステアとポルトゥスのガラスに関する初めての総括的なその研究といえるもので、ローマのドイツ考古学研究所、アメリカ・アカデミーがオステアの第III、IV、V地域で実施した37回分の発掘、アウグスブルク大学が市場の区画で実施した発掘、ローマの英国アカデミーがポルトゥスの皇帝宮殿で行った発掘、ならびにオステア考古学公園が保管・管理するのガラス遺物や記録に基づいたものです。この論文は、Openeditionで、ネット上に公開

されています。

紀元前1世紀末～紀元後2世頃にオスティアとポルトゥスで使用された器形



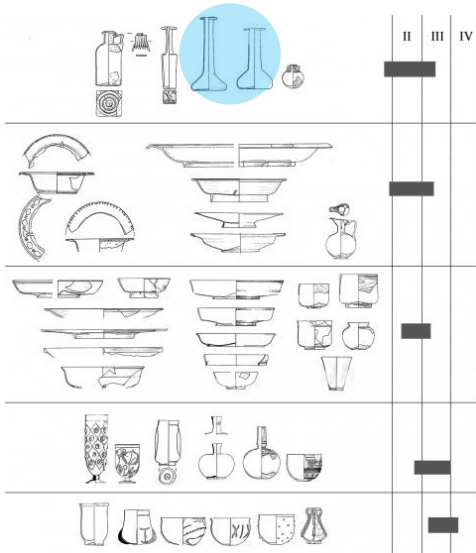
B. Lepri et L. Saguì 2018, fig.4

サグイーレプリ両氏は、この中で、オスティアとポルトゥスで紀元前1世紀から6世紀にかけて使用されたガラス容器を3枚の器形図とその主な使用年代の表で示しました。この傾向はローマでもほぼ一致するそうです。

まずは、紀元前1世紀から紀元後2世までの1枚目です。紫色で囲んだガラス器は、ヘレニズム時代からの伝統を受け継ぐ鑄造と研磨によって製造された杯や皿や碗などです。水色で囲んだものは、紀元前1世紀半ば頃にシリアでおそらく開発された吹き技法によるものです。吹き技法がいち早くローマにも伝わっていたことは、哲学者セネカが驚きをもって書

き記していますが、大小さまざまな形の器が短時間に大量に生産できることにより、ガラスが庶民の手に届く日用品として浸透しました。たとえば、これまでの口の開いた杯や碗類に加え、口のすぼまった小瓶類、片把手付きの水差し、アンフォラ型の水差しや、食べ物の貯蔵用もしくは埋葬時に骨壺として使用した大型の壺などが登場しています。なお、これ以降は、吹き技法がガラス製造の主流となります。

2世紀～4世紀初頭にオステアとポルトウスで使用された器形



片把手付き方形瓶、ウンゲントリウム（香油瓶）、
アリュバロス*
* 浴場などでストリギリスと共に使われるタイプの両
把手付香油瓶

B. Lepri et L. Sagui 2018, fig. 5

続いて2世紀から4世紀初頭のガラス器です。一段目は、2世紀から3世紀初頭のもので、片把手付き方形瓶、ウンゲントリウム（香油瓶）、アリュバロスなどがみられます。そして首の長いうろそく型とも呼ばれるウンゲントリウムのタイプは（Kick!）

2世紀頃のウンゲタリウム4本が副葬品として成人男性の棺に入れられていた事例

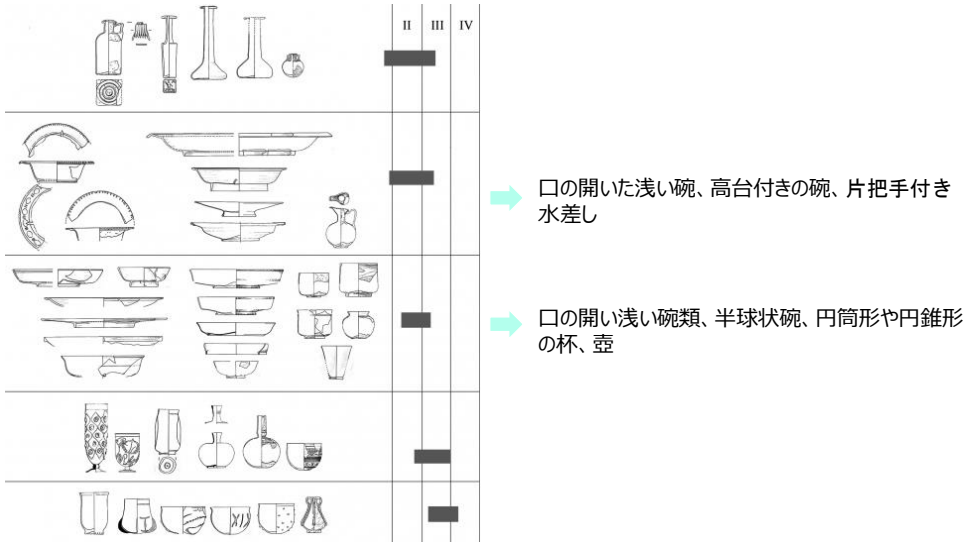


2019年春、ローマ門のネクロポリスから発見
テラコッタ製棺の蓋として置かれていたタイルの一枚に残された半月状の判bollo lunatoにより、2世紀頃に年代設定、副葬者は40代男性、ガラス製ウンゲタリウム（香油瓶）4本と細工のなされていた豚の骨細工が共伴

7

たとえば一昨年の春、オスティアのローマ門のネクロポリスで発見された成人男性の棺の中で4本収められていました。右は、そのうち復元された香油瓶の1本です。帝政初期の火葬の骨壺からは、遺体と共に焼かれて溶けてひしゃげた小瓶が見つかることが多いですが、土葬は長く良い香りを保つためか、より大型の首の長いものが複数副葬されることもありました。

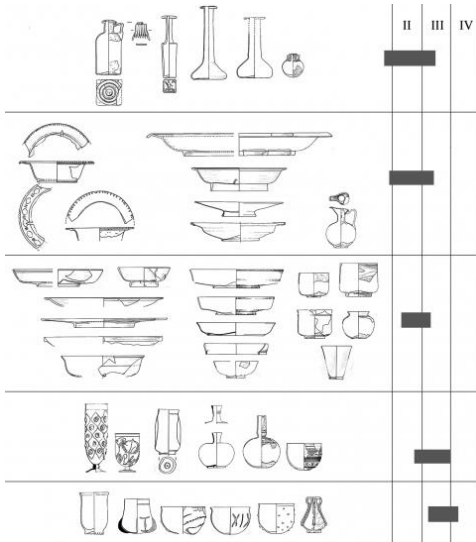
2世紀～4世紀初頭にオスティアとポルトウスで使用された器形



B. Lepri et L. Sagui 2018, fig. 5

二段目から三段目にかけて、2世紀から3世紀初頭までのガラス器をみると、口が大きく開いた浅い碗類、高台付きの皿が好まれたことが見て取れます。また、円筒形や円錐形の杯も登場します。

2世紀～4世紀初頭にオスティアとポルトウスで使用された器形



→ 溶けたガラスを貼りつけたり、紐状に巻き付けたゴブレット、凹みのある杯、球状フラスコ瓶、半球状碗

B. Lepri et L. Sagui 2018, fig. 5

四段目の2世紀末から3世紀にかけては、脚台のあるゴブレット、凹みのある杯、口がすぼまって胴体が球状のフラスコ瓶や半球状碗がみられます。ゴブレットには、溶けたガラスを紐状や円盤型に貼りつけた装飾、球状のフラスコ瓶には、カット装飾がほどこされたものもありました。

消防署通りの泉近く出土のカットガラス断片

	II	III	IV

Isings 103型

3世紀 (~4世紀)

Vaglieri D., "Ostia - Nuove scoperte presso le Terme e la Caserma dei Vigili", NSc 1909, pp.197-209.

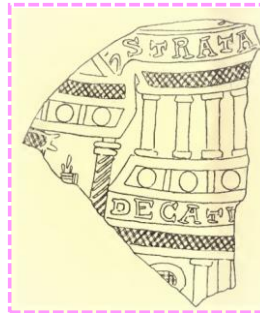
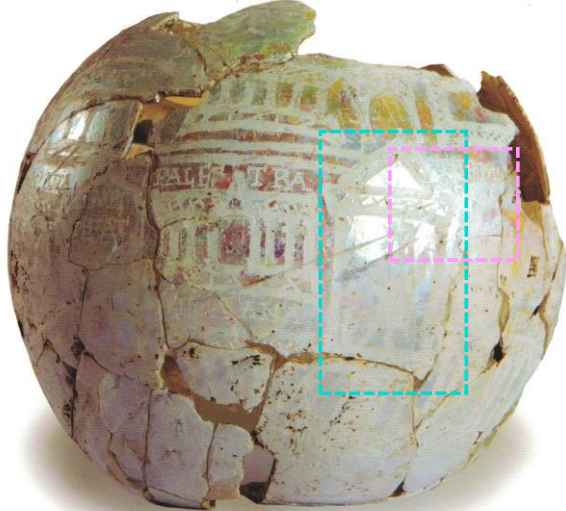
OSTIA ANTICA
PIANTA GENERALE

消防署通り

10

たとえば、レプリーサグイの表にもみられるIsings103型と呼ばれる3世紀から4世紀にかけて特徴的な球状フラスコ瓶のタイプには、イタリア人考古学者ダンテ・ヴァリエリが消防署通りの泉近くで発見したという、カット装飾が施された断片があります。この断片については、残念ながら所在不明で、実物の写真資料もなく、スライド右上に示した1909年の発掘時のスケッチが残っているのみです。

プテオリ港（現ポツォーリ）の景観付き球状フラスコ瓶



オスティア出土の断片は、プテオリの景観付き球状フラスコ瓶に共通する、礼拝像を有する神殿の向かって右上部とその横の列柱廊を示している

プテオリの景観付き球状フラスコ瓶
D: 10.6 cm
アウグスタ・エメリタ出土（成人女性の土葬墓）
スペイン、メリダ考古学博物館所蔵
Inv.no. SAHGM.1974.002

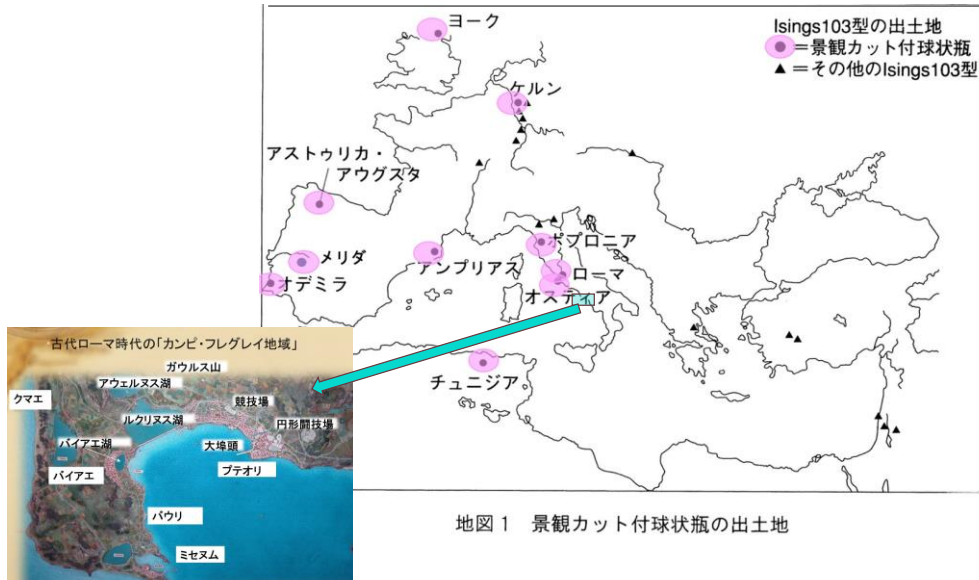
M. A. Calzado, J. M. A. Martines 2012, p. 211-212, fig.71.

11

それでも、その主題がプテオリの景観の一部であることが、同様なカット装飾を有する4点の類例との比較でわかります。プテオリとは、ポルトゥスが建設される以前の共和制末期から帝政初期にかけて、エジプトからの穀物輸送性に代表されるような大船団が到着するイタリアのティレニア海側の「東の窓口」としてその名を馳せた港です。

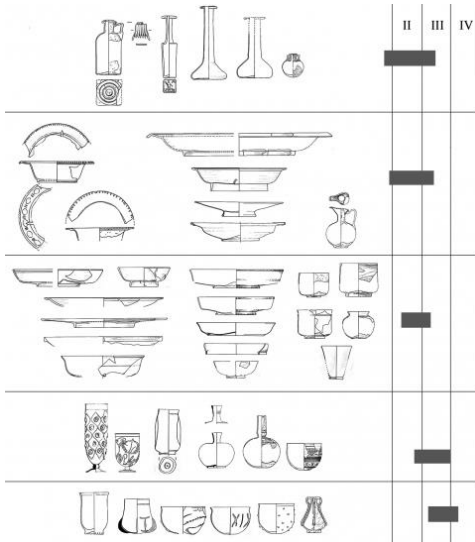
左の写真は、スペインのメリダで、ローマ時代の成人女性の土葬墓で発見された類例の一つです。円筒形の首の部分は欠損していて、球状の胴部のみが復元されました。まずは、水色の点線で囲った四角の部分をご覧ください。二本の柱に支えられた三角形の破風を有する神殿正面図とその中に立つ神の礼拝像がみられます。そして、その右上部分、ピンクの点線で囲ったところが、オスティアの断片に対応する意匠にあたります。三角形の破風の一部と礼拝像の冠や左手に持つもの一部、その右側の列柱付き建物と道を意味するラテン語の銘文STRATA、さらに十三番目の神を意味すると解釈されるとされるDECATRIAの一部がみられます。なお、これらの瓶がプテオリを描いていることは、プテオリの港を象徴する大埠頭図の上に、プテオリとラテン語でその名が記された瓶があることから明らかです。それらのカット装飾の特徴は、非常に浅いカットであることです。太いラインを旋盤研磨で描き、先の尖った道具で細部を描いています。このため、すりガラスのように、カットしたところがつるつるとして表面の中で白く浮きたったと思われれます。

プテオリ・バイアエの景観付き球状フラスコ瓶



なお、こちらがプテオリおよびその近隣のバイアエの景観がカットされた球状フラスコ瓶の分布図です。オステティア以西の帝国西方に広がっていることがわかります。「東方の窓口」であったプテオリにはいち早くエジプトのアレクサンドリアからのガラス職人が流入し、工房も築いた可能性が高いことから、そこで製造されたガラス瓶が土産物として帝国西方に持ち帰られたのではないかとみなされています。

2世紀～4世初頭にオスティアとポルトウスで使用された器形

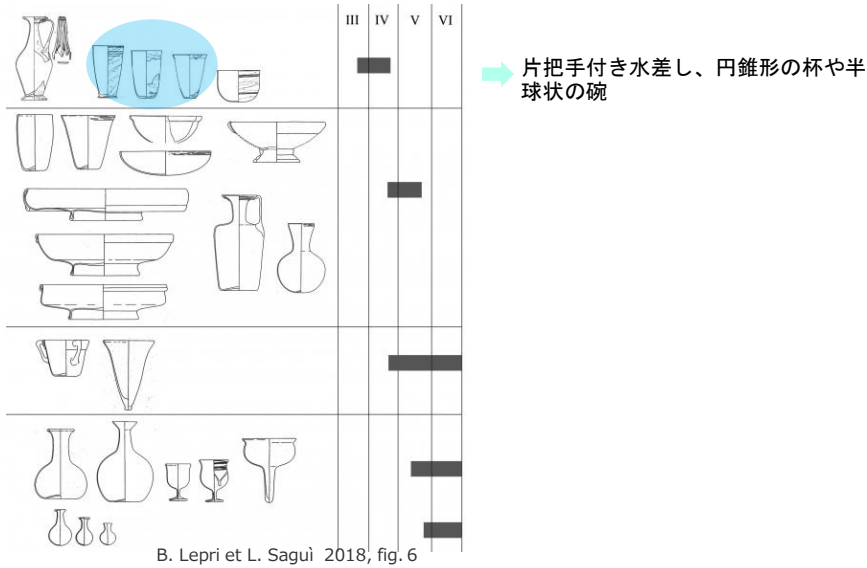


B. Lepri et L. Sagui 2018, fig. 5

→ ガラスの表面がまだ熱で柔らかいうちに挟んだりつまんだりした装飾を有する半球状碗、瓶、杯

最後の5段目、3世紀から4世紀にかけては、円筒形の杯や半球状の碗の器形と、ガラスの表面がまだ熱で柔らかいうちに挟んだりつまんだりして作る、つまみ装飾が流行したことが見て取れます。

3世紀末～6世頃にオスティアとポルトゥスで使用された器形



続いて3世紀末から6世紀のガラス器です。一段目の3世紀末から4世紀にかけては、片把手付き水差し、円錐形の杯や半球状の碗と、飲料容器などがみられます。

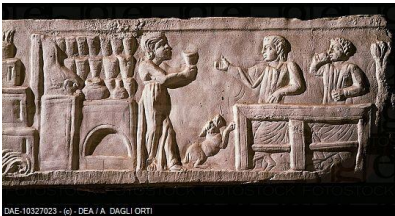
3世紀の壁画や浮彫にみる円錐形の杯



オスティア、ラウレンティーナ門のネクロポリス（墓31）出土
壁画、3世紀 ヴァチカン博物館所蔵



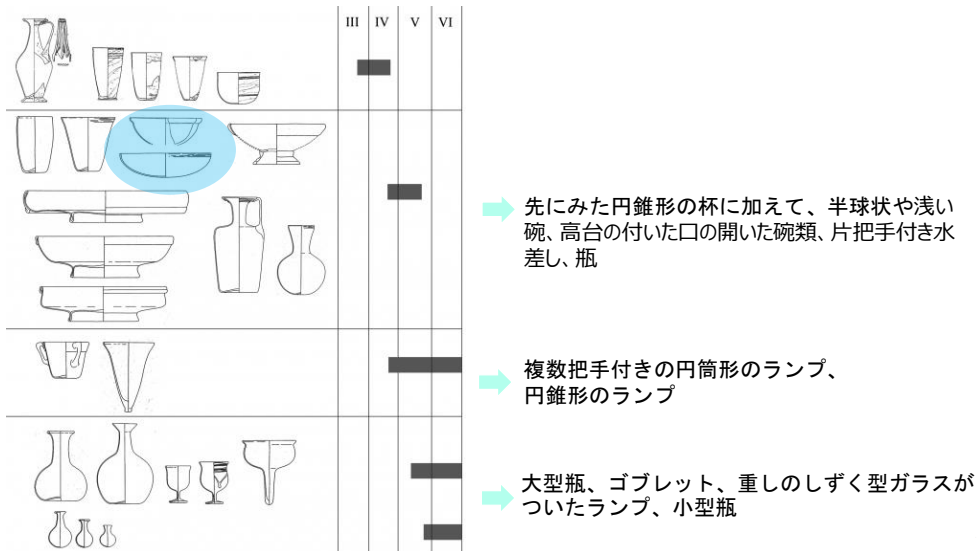
オスティア、Caseggiato del Termopolio(ディアナ通りの飲食店)
壁画、3世紀頃、in situ



イゾラ・サクラのネクロポリス、墓90出土
石棺正面（右）、3世紀、
フィウミチーノ船舶博物館所蔵 inv.
1340 (MCR 3526)

オスティアやそのネクロポリスから出土した3世紀頃の壁画や石棺の浮彫に、それらの飲料容器の描写がみられます。

3世紀末～6世紀にオスティアとポルトゥスで使用された器形



B. Lepri et L. Sagui 2018, fig. 6

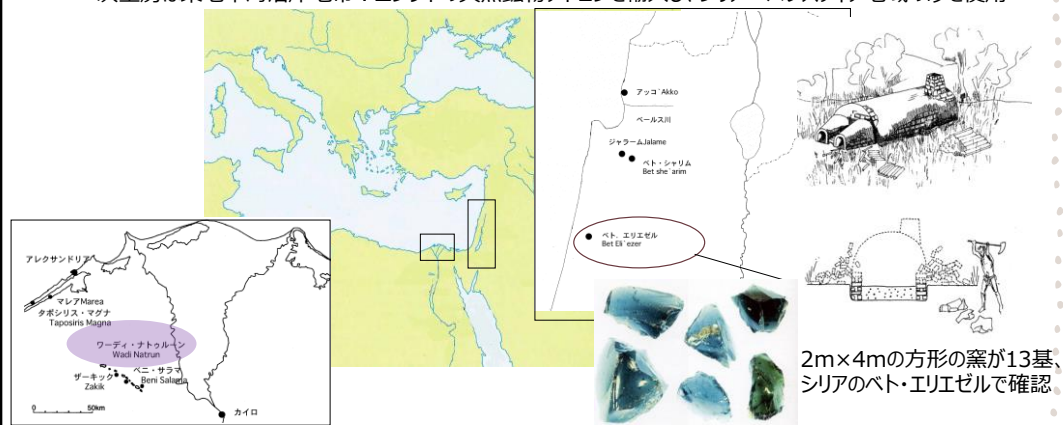
続いては二段目の4世紀後半から5世紀にかけて使用されたガラスです。先にもた円錐形の杯に加えて、半球状や浅い碗、高台の付いた口の開いた碗類、片把手付き水差し、瓶が登場します。この後注目するキリスト教的主題を有するカット・ガラスは、この口の開いた浅い碗のタイプです。三段目の4世紀末から6世紀まで一貫して使用されているのは、教会などで使用される天井から吊るすタイプのランプです。また5世紀から6世紀にかけては、片把手付きの水差しではなく、大型の瓶が水や葡萄酒などを注ぐ器として、足付きのゴブレットが杯として使用されていることが見てとれます。

ローマ時代のガラス製造（二段階）：

大型の窯で原料から原料塊を製造する一次工房

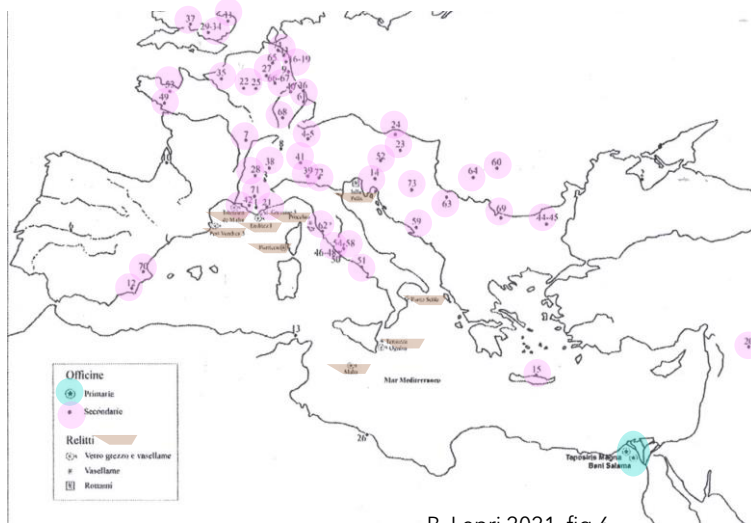
小型の窯で原料塊を再溶融して製品を製造する二次工房

一次工房は東地中海沿岸地帯：エジプトの天然鉱物ナトロンを輸入し、シリアーパレスティナ地域の砂を使用



さて、先ほど本日これから注目する浅いガラス碗がローマで製造された可能性があると申しましたが、当時のガラスの製造には二段階あったことを留意いただきたいと思います。すなわち、ガラスの主原料である砂やナトロンを大規模な窯で数日間かけて溶かし、原料塊を作り、それを砕いて販売する一時工房と、その原料塊を輸入して小型の窯の坩堝で溶かし、製品化する二次工房です。近年の組成分析でもローマ・ガラスは1世紀から8世紀頃までは変わらずシリアーパレスティナ地方の砂とエジプトの天然ナトロンを溶融した、エジプトやシリアーパレスティナの一次工房から、帝国各地に原料塊が輸出されたことが明らかとなっており、難破船からも原料塊が船のバラストとして利用されていたことがわかっております。

2世紀～4世紀の一次工房、二次工房、難破船（ガラスの原料塊や容器積載）



B, Lepri 2021, fig.6



バルバラ・レプリ『二世紀から三世紀のガラス：ローマ～オステリアーの製造と流通』、ローマ、2021年

こちらは先ほどのバルバラ・レプリによるローマ帝国の一次工房と二次工房の分布、そしてガラス製品を積載した難破船です。今年7月に出版されたばかりの『2～3世紀のローマのガラス』に収録されています。

拡大コピーしても小さいのが玉に瑕ですが、一次工房は水色の円、二次工房はピンクの円、ガラスを積載していた難破船を舟形にすると、エジプトで製造された原料塊が、船に積載されて帝国西方北方に広がる二次工房に輸出されていたことがわかります。ガラスの原料塊は特に船の安定剤バラストとして船底に積まれることが多く、ガラス製品と共に船で運

ばれました。

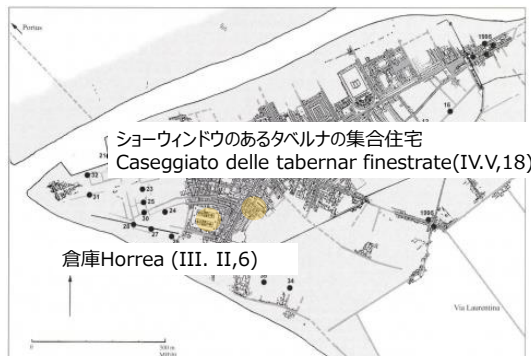
オステリア出土のガラスの原料塊（カレット）：ララリウムのカセツジャートの中庭から出土



B. Lepri et L. Sagui 2018, fig.16 (オステリアの収蔵庫 inv.no.13871)

オステリアでは、このように船で運ばれたガラスの原料塊の一つがララリウムのカセツジャートの中庭から出土しています。サグイ先生は収蔵庫でこれを目にし、びっくりされたそうです。3キロほどの重さはある、まぎれもないガラスの原料塊です。なお、この周辺でガラス製造にかかわるような遺構は確認されていないそうです。このように塊だと濃い緑色のように見えますが、溶かして吹いて器壁が薄くなると、淡い緑色がかったローマ・ガラスで一般的な色調となります。これをより無色透明に近づけたい場合には、初期にはマンガンが、後期になるとアンチモンなどの消色剤を加えられました。

オスティアおよびポルトゥスの2～3世紀のガラス製造（二次工房）



左側がオスティアでの、右側がポルトゥスでの二次工房を示唆する原料塊や成型途中で生じるテストピースや屑やひしゃげた製品



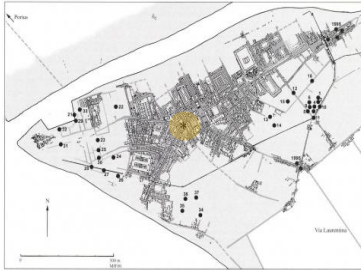
B. Lepri et L. Sagui 2018, fig.16 (オスティアの収蔵庫 inv.no.13871)

20

オスティアとポルトゥスではまた、2世紀から3世紀にかけて二次工房があったことを示唆する成型途中の屑やドロップ型のテストピース、変形してしまった製品などの断片が、サグイーレプリによって確認されています。オスティアでは第三地区の倉庫 Horrea (III. II,6)から原料塊や成型途中で生じる屑やテストピース、製品等が、第四地区のショーウィンドウのあるタベルナの集合住宅 Caseggiato delle tabernar finestrata(IV.V,18)で原料塊やガラスの溶けた塊が発見されました。窯址は発見されていないので、これらの出土品が発見された場所が、そのまま工房のあった場所と断定できないかもしれません

が、その可能性が高いと言えるでしょう。
ポルトゥスでは、円形の窯址、原料塊や成型途中で生じる屑やテストピース、製品等が宮殿Palazzo imperiale区域から発見されています。

オステアの5世紀のガラス製造：二次工房の窯址 2つ



1997-2000年にかけての市場区画がアウグスブルク大学により再調査



5世紀の二次工房の窯址



ガラスの原料塊と成型途中の屑や製品断片

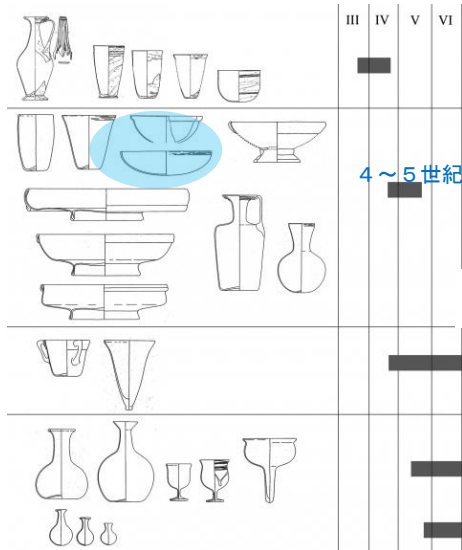
[Ausgrabungen im sogen. macellum von Ostia \(uni-augsburg.de\)](http://Ausgrabungen%20im%20sogen.%20macellum%20von%20Ostia%20(uni-augsburg.de))

21

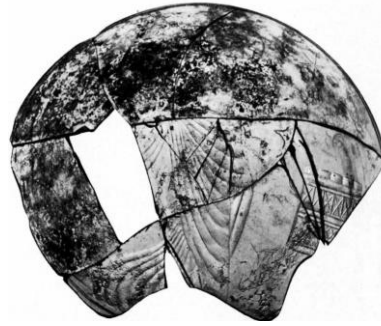
こちらは5世紀に下りますが、1997年から2000年にかけてAugsburg大学が市場区画を再調査した時に発見された5世紀の二次工房の窯址2つと、原料塊や成型途中で生じる屑や製品断片です。

したがって、最近の研究のおかげでオステアやポルトゥスでは2世紀頃から3世紀にかけて、また5世紀にガラスの二次工房が存在していたことが明らかとなっています。さらにローマでも2～3世紀の同様な二次工房を示唆する痕跡が5箇所を確認されています。

初期キリスト教的主題付きカットガラス浅碗



B. Lepri et L. Sagui 2018, fig. 6



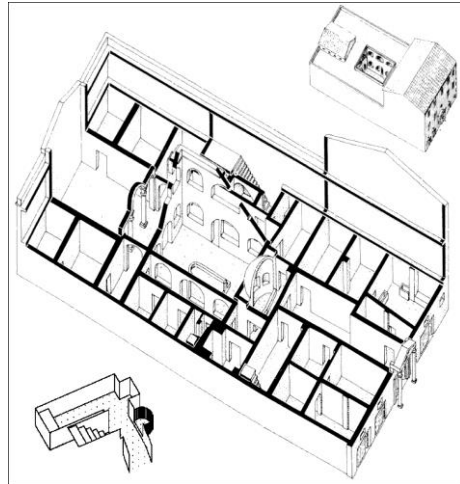
M. Floriani Squarciapino, *Coppa cristiana da Ostia*, in *BdA*, 37, 1952, p. 204-210. **inv. 5201**



それでは、本日にテーマである、オステティアやポルトゥス出土のキリスト教的カット・ガラス碗とその意匠ならびに工房と流通についてみていきたいと思えます。先に見ていただいたサグイーレプリの器形表にあったように、4世紀後半から5世紀にかけて、口の開いた浅い碗の器形がありました。このような浅碗は、通常緑がかった透明か無色透明に近い色で、碗の内側から観賞するように碗の外側にカットが施される、という特徴を持っています。先に申し上げたように、このようなカットガラス碗断片は、ローマからも多数発見されており、特にそのうち2つのタイプについては、ローマ工房聖であった可能性が

高いとみなされています。1952年にイタリア人考古学者のマリア・フロリアーニ・スクアルチャッピーノによって、プロティコの邸宅の下水から発見された16断片から復元されたキリスト教的カット装飾付きの浅碗もその一つです。

プロティロの邸宅 Domus del Protiro (V,II, 4-5)

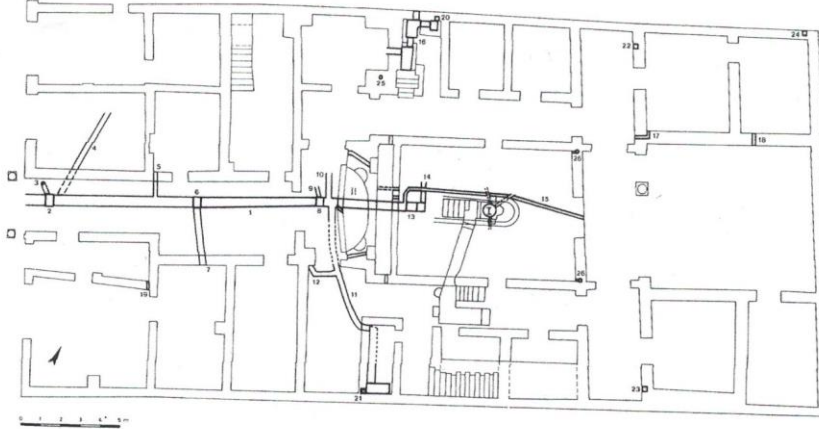


23

プロティロの邸宅は、ラウレンティウス門を入ってすぐの第V地区に位置します。オスティアの中でも大きなインスラの一つで、邸宅の名称の由来ともなった張り出した大理石製の記念的入り口の三角破風には、元々は所有者の名前が刻まれていたと思われます。3世紀半ば頃に、元々のセウェルス朝時代の建物に手が加えら、泉のある中庭を持つインスラへと改築されたと考えられています。この邸宅には、中庭部分から井戸とニッチのあるおそらく私的礼拝堂のある地下構造もみられます。

プロティロの邸宅の下水システム

Fig. 112. V.ii.4-5, House of the Porch, drainage-system



J. S. Boersma 1985, p.96, fig.112

24

なお、スクアルチャピーノは邸宅のどの部分に位置する下水からこのガラス碗断片が発見されたか明言しておらず、プロティロの邸宅の下水システムについて述べたBoersmaも、残念ながら言及はしていません。

プロティロの邸宅出土のカットガラス浅碗



FIG. 1 - OSTIA - COPPA VITREA



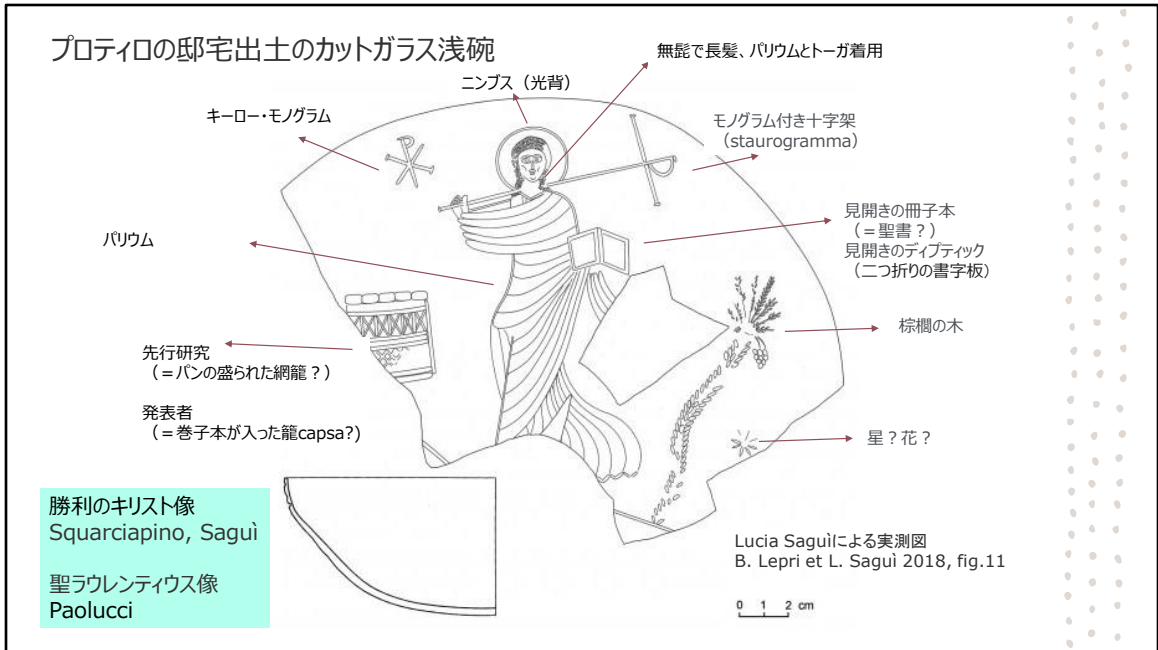
FIG. 2 - CALCO DELLA COPPA DI OSTIA

淡緑透明ガラス

D. 18cm, H. 5.6cm

M. Floriani Squarciapino, *Coppa cristiana da Ostia*, in *BdA*, 37, 1952, p. 204-210.

この浅碗については、発掘時にスクアルチャッピーノが4枚の白黒写真を掲載していますが、現在でもカラー写真は公表されておらず、私も実物を目にしたことはまだありません。左の写真が、鑑賞者と同じ視点で碗を内側からみて写したものです。左から上にかけて、膜のようなものでガラスが覆われていることがわかります。サグイ先生もこの手の浅碗には、原料のせい、あるいは土壌のせい、白い膜状の銀化が起こりやすいとおっしゃっていました。ソーダ・石灰ガラスであるローマ・ガラスは、とりわけ水分の多い場所では銀化しやすいといわれるので、下水で断片として発見されていたこの碗の状態は通常よりも悪いものでしょう。ガラスの表面からアルカリイオンが徐々に溶出し、脱アルカリ化されることで膜が形成されるのです。最初は不透明な白い膜だが、重なるにつれ、茶色や黒っぽい膜となるといわれています。実際、スクアルチャッピーノも、この銀化部分が剥落した箇所では、カット部分も一緒に剥がれてしまったと伝えています。なお、右は、碗の外側に施されたカット装飾の図案がより明確にみられるように、碗の外側のカット装飾を石膏どりしたものです。



そして、こちらがルチア・サグイによる実測図です。スクアルチャピーノの掲載した図にはない、細部も記されています。

この主題が明らかにキリスト教的であることは、人物像の頭部左の空間に記されたキリストの名前の最初の頭文字を組み合わせたキーロー・モノグラム、そして人物像が持つモノグラム付き十字架から明らかです。さらにこの人物像が聖なる人物であることは、頭部の光背が示しています。発掘者のスクアルチャピーノは、この人物像をキリストと捉え、左脇の籠はパンの増加の奇跡場面とみなし、勝利のキリスト像と解釈しました。レプリとサグイは、2018年の論文では図像解釈には深追いせず、スクアルチャピーノの説を継承しているが、帝政後期のカットガラスに関する二冊の研究書を出したパオルッチは、聖ラウレンティウスの可能性をあげています。

5世紀の聖ラウレンティウス像



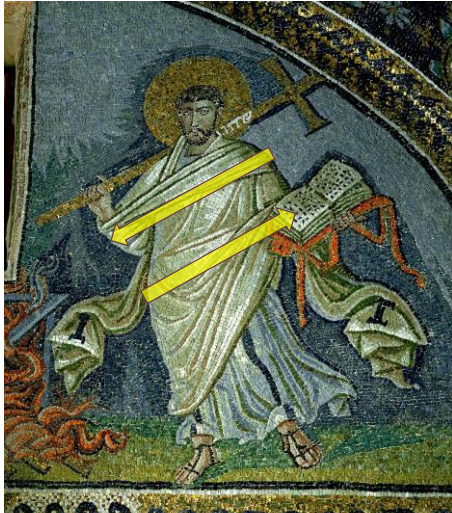
聖ラウレンティウス
ラヴェンナのガッラ・プラチディアの霊廟（5世紀、424-450年頃建造）

[Il Mausoleo di Galla Placidia a Ravenna e i suoi mosaici - Arte Svelata](#)

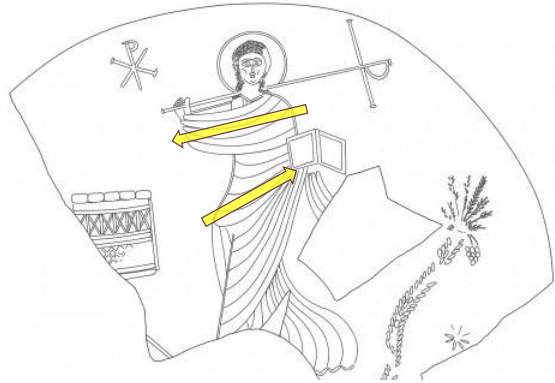
27

5世紀初頭から半ばにかけて建設されたラヴェンナ、ガッラ・プラチディアのモザイクに描かれた聖ラウレンティウス像が、その根拠としてあげられています。聖ラウレンティウスは、ウァレリアヌス帝が教会聖職者を対象に行った258年の迫害時に、ローマの司教シクストゥス二世に続いて殉教した助祭長です。その殉教は鉄格子の上で炎に焼かれるという壮絶さで、このモザイクでも中央の窓の下に燃え盛る炎と鉄格子が描かれています。4世紀半ばのローマ教会の祝日表*Depositio Martyrum*で8月10日に、単独でその祝日が祝われていることから、当時のローマのキリスト教徒に崇敬を集めたことがうかがわれます。

5世紀の聖ラウレンティウス像



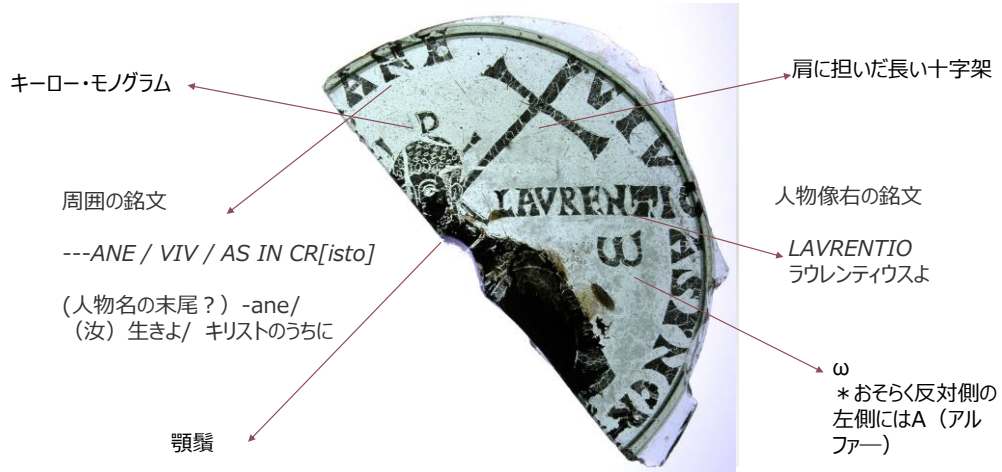
聖ラウレンティウス
ラヴェンナのカッラ・ブラチディアの霊廟（5世紀, 424-450年頃建造）



- 共通点
動きのある人物像の構図
- 頭の光背
 - 鑑賞者に目を向けるほぼ正面向きの顔
 - 長い十字架の手前を右手に持ち右肩に担ぐポーズ
 - 左肩から右手首にかけてはパリウムが強く引っ張られている
 - 開かれた冊子本（＝聖書）を右腰から引っ張られたトゥニカで覆われているであろう左手で掲げる
 - 左手からたゆたうトゥニカの裾や左足元の裾の動き

その類似点をパオルッチは詳細には述べていませんが、発表者が比較したところ、確かに多くの類似点が確認されました。頭の光背、ほぼ正面向きの顔、長い十字架の手前を右手に持ち右肩に担ぐポーズ、左肩から右手首にかけてはパリウムが強く引っ張られている様子、開かれた冊子本（＝聖書）を右腰から引っ張られたトゥニカで覆われているであろう左手で掲げるポーズ、左手かたゆたうトゥニカの裾や左足元の裾の動き。このような、衣服の左右への動きや、裾の動きは、この人物像に動きを与えています。なお、相違点としては、オスティア出土の人物像は首にかかる長い長髪であること、右側に実のなった棕櫚の木とその下に星のようなもの、そして担ぐ十字架が *sutaurogurannma* という組合せ文字を有する点、キーロー・モノグラムと「パン籠」とスクアルチャピーノが捉えた籠などです。

4～5世紀の聖ラウレンティウス像？



キロー・モノグラム

周囲の銘文

---ANE / VIV / AS IN CR[isto]

(人物名の末尾?) -ane/
(汝) 生きよ/ キリストのうちに

顎鬚

肩に担いだ長い十字架

人物像右の銘文

LAVRENTIO
ラウレンティウスよ

ω
*おそらく反対側の
左側にはA (アル
ファー)

聖ラウレンティウス、金箔ガラス、10.4 x 5 x 0.7 cm、
伝ローマ出土、4～5世紀、メトロポリタン美術館、inv.no. 18.145.3

Fragmentary Bowl Base with Saint Lawrence | Byzantine | The Metropolitan Museum of Art (metmuseum.org) 29

同様な十字架を担いだラウレンティウスの単独像は、ローマのカタコンベからの出土で有名な4～5世紀の金箔ガラスでもみられます。このラウレンティウス像は、光背の代わりにキロー・モノグラムが頭の背後に配され、顎鬚をはやしている点が異なるが、ほぼ正面むきの顔や十字架の角度などは先の二点と似ています。なお、このラウレンティウス像には、始まりと終わりを示すアルファとオメガのオメガがその名の下にみられます。なお、プロティロの邸宅近くのラウレンティウス門の外には、巡礼宿xenodochiumを備えた聖ラウレンティウスに捧げられた教会があったことが、考古学的には証明されていませんが、文献史料によって示唆されています。その教会は、伝説によれば、キリスト教に改宗したローマの一貴族ガツリカヌスによって、その友人のヒラリウスの土地に建てられたと言われています。そこで、ラウレンティウスと思しき人物が描かれた碗が、この門のすぐそばの邸宅から出土したことは、古代末期のオスティアを著したDaglas Boinが述べているように、示唆的にも取れます。

勝利のキリスト像



ラヴェンナ、大司教館付属礼拝堂モザイク（勝利のキリスト）494-519年



一方で、スクアルチャピーノが提唱した勝利のキリスト像の比較事例も、ラヴェンナの5世紀末から6世紀初頭のモザイクにみられます。光背、正面向きの顔、肩までかかる長髪、左手で十字架を肩に担ぎ右手に開いた冊子本を手にしているところなど、確かに似てはいます。

ところで、これまでパン籠と捉えられてきた左の籠について、発表者には納得がいきません。なぜなら初期キリスト教美術で描かれるパンは、十字架を象徴するような十字の切れ目が見えるように描かれたものが多く、またパン籠も下がすぼまった形が多いからです。

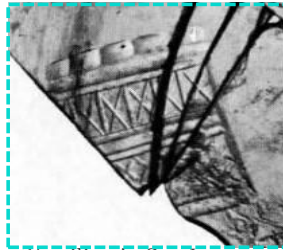
パン籠ではなく巻物の入れ物Capsa ?



→ 開かれた冊子本

→ 巻物の入れ物

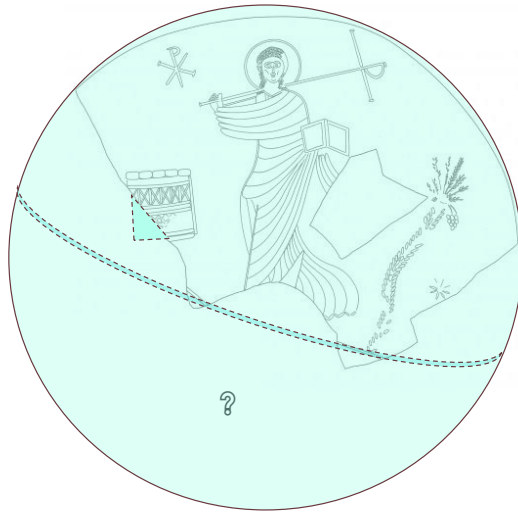
ローマ、ドミティッラのカタコンベ、殉教聖女ウエネランダ



ミラノ、Milano, Cappella di Sant'Aquilino in San Lorenzo Maggiore, Catino destro, Mosaico del Cristo Magister

これに対し、ほぼ方形に描かれたこの籠は、むしろ巻物を入れて運ぶCapsa、その上に並ぶ円筒形のものは、入れ物から出た巻物の先の部分ではないかと思われるのですが、いかがでしょうか。さらに、開かれた冊子本と共に巻物が旧約と新約を示唆するように殉教聖人の傍に描かれた事例は、ドミティッラのカタコンベ、殉教聖女ウエネランダの壁画でもみられます。もっとも、カプスラの描写とするには、把手の部分や鍵の部分描かれていないという違いはあります。

教会関係の殉教者を示す可能性も



もっとも、この碗の断片の元々のサイズを考慮すると、画面の下3分の一ほどが欠けており、サグイの実測図によって初めて示された、断片に残る刻線をやや強行的に結びつけると、画面が分割されているようにみえます。これはEsergoといわれる部分で、これらのガラス浅碗が影響を受けていると思われる銀製の皿にみられる構図です。先にあげた円形の金箔ガラスでも同様な構造をしたものがあります。そこで、このかけている部分に、この人物像を特定するような他の要素が記されていた可能性はあります。先にあげたラヴェンナのモザイクの人物像について、ラウレンティウスではなくウィンケンティウスとする説もあるように、初期キリスト教の図像は、その人物の名を示す銘文が伴わない場合、断定するのが難しいのです。

プロティロの邸宅出土の浅碗のカット装飾の特徴とその工房をめぐって

広い面を深く陰刻（Sagui）、グループA：彫刻的な人物像（Nagel）、「マエストロ・ダニエル」（Paolucci）



FIG. 4 - LA TESTA DI CRISTO
DETTAGLIO DELLA COPPA OSTIENSE

碗の内側から見た時に、人物や事物が塑性的な浮き上がり方がするように、広く深く掘られた陰刻



顔の特徴：

大きなアーモンド形の寄り目に
まっすぐな鼻すじ、二本の横棒
であらわされた口

サグイ先生によれば、このタイプの碗は、碗の内側から見た時に、人物や事物が塑性的な浮き上がり方がするように、広く深く掘られた陰刻で、顔の特徴は、正面向きも横向きも、いずれも大きなアーモンド形の寄り目にまっすぐな鼻すじ、二本の横棒であらわされた口だということです。なお、パオルッチは「マエストロ・ダニエル」グループと、また昨年末に『古代末期の具象的カット装飾ガラス製品 *Die figürlich gravierten Gläser der Spätantike*』を上梓したシュテファニー・ナーゲルは彫刻的な人物像グループA “plastisch wirkende Figuren”に分類しています。クリプタ・バルビヤパラティーノの北東斜面他、ローマで出土したカットガラス碗断片を200点以上手にしてきたサグイ先生によれば、その数の多さからもローマで活動した工房の1つと考えられるのではないかと、ということでした。

グループAの出土分布図

Stilgruppe A – plastisch wirkende Figuren



Abb. 159 Fundorte von Gläsern der Stilgruppe A. © S. Nagel

こちらが、ナーゲルによって提示されたグループAの分布です。イタリア半島を中心に、北は西はスペイン、北はドイツ、東はブルガリア、南はアルジェリアやチュニジアに分布していることがわかります。

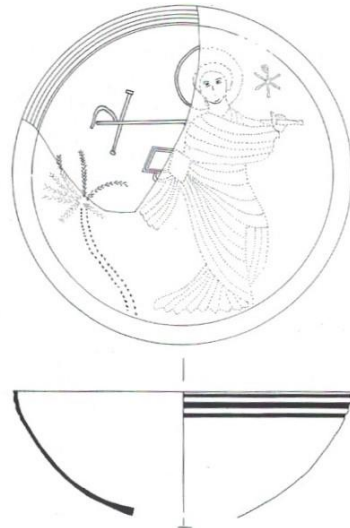
フランス、Narbonne出土の類例

Stilgruppe A – plastisch wirkende Figuren



Abb. 159 Fundorte von Gläsern der Stilgruppe A. © S. Nagel

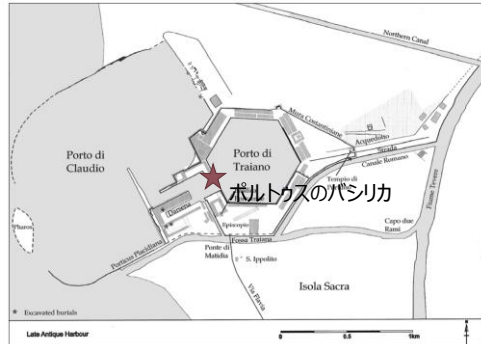
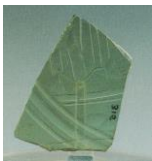
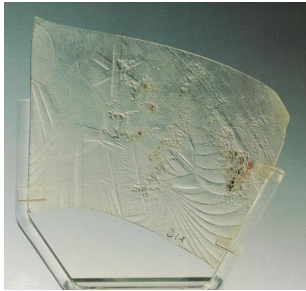
キリスト教的カット付き断片
 淡緑透明、D. 14cm
 Narbonne, Clos de la Lombarde 出土
 Narbonne, SRA考古局収蔵



Foy-Nenna 2001, p.228

なお、フランスのナルボンヌからは、プロティロの邸宅出土の浅碗に類似した、十字架を担ぐ人物像の断片がも出土しています。こちらはフランスのローマ～中世のガラスに詳しいFoyによる復元想像図ですが、オスティア出土の碗を参考にして復元したとのこと。ここで、実際の断片部分、点線以外の実線の碗の左上部にあたる断片部分のみに注目すると、頭の光背、sutaurogurannmaモノグラム付き十字架、開いた冊子本もしくはディプティック、そして棕櫚の木の葉の部分が共通しています。年代はFoyは5世初頭に設定しています。

ポルトゥス、ポルトゥスのバシリカ出土の浅碗断片2点



律法の授与図のカット装飾付き断片

無色透明、7.6cm×10.8cm×1.5cm

Portus, Xenodochio di Pammachio

(=ポルトゥスのバシリカ) 出土

Musei Vaticani (Museo Sacro inv. 60313)

36

同じ工房製のものと思われるガラスの浅碗断片が2点、ポルトゥスのバシリカからも発見されています。しかしながら、その発見は学術的な発掘によるものではなく、1865年にポルトゥスの土地を所有していたトルロニア家による、美術品を探してコレクションする目的のものでした。そして当時、その出土場所は「パンマキウスの巡礼宿」と言われていましたが、現在では375年頃に建設された、ポルトゥスのバシリカと同定されています。なお、このバシリカから出土した2つの断片は、トルロニア家から教皇ピオ9世へ献上され、現在ヴァチカン博物館に所蔵されています。

律法の授与図 (Traditio Legis)



金箔ガラス
最大直径: 12.4 cm
4世紀半ば~末
Toledo Museum of Art,
inv.no. 1967.12

[Fragment of a shallow bowl: Christ giving the law to Sts. Peter and Paul - Works - Toledo Museum of Art](#)



37

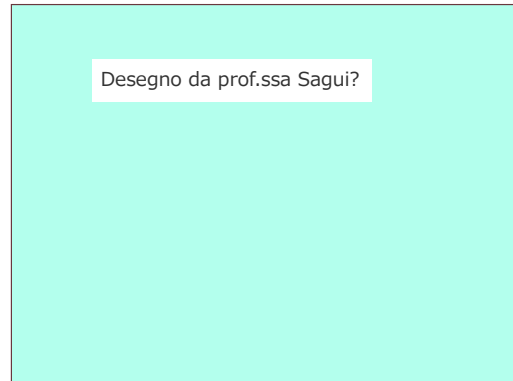
「律法の授与図」は、4世紀半ば頃に登場する図像レパートリーで、壁画や壁面モザイク、石棺、ガラスを含む工芸品などにみられます。その基本構図は、画面中央高所に位置するキリストを中心に、ペテロが右下、パウロが左下に配された三人一組の三角形です。キリストは左手でペテロに開いた巻物を授与し、ペテロは時に長い十字架を左手で抱えながら、パariumで覆った両手で巻物をうやうやしく受け取ります。巻物には、この場面の名称の元ともなった*DOMINVS LEGEM DAT*や、それに類する銘文が記されています。一方でキリストは右手をあげてパウロにも祝福を与え、パウロは右手をあげて巻物を受け取るペテロの場面を称揚します。また、ペテロとパウロの背後には棕櫚の木が配され、パウロの背後の棕櫚には復活のシンボルであるフェニックスがとまっていることもあります。さらに、キリストは天国の四つの小川が流れる丘に立つことも多く、ペテロとパウロの背後にさらにベツレヘムとイエサレムを象徴する城塞が加えられ、その門から子羊たちが入場する場面が加えられることもあります。

なお、4世紀半ば頃のペテロとパウロは、まだ両者の描き分けがなされておらず、両者とも額の禿げあがった顎鬚をたくわえた哲学者風か、両者とも短い髪に髭のない若者として描かれることが多いです。キリストも同様に、顎鬚があたりなかったり、髪の毛が長かったり短かったりと、様々に描かれます

ポルトゥス、ポルトゥスのバシリカ出土の浅碗断片 1



無色透明、7.6cm×10.8cm×1.5cm
Portus, かつてのXenodochio di Pammachio
(現Basilica Portuense) 出土
Musei Vaticani (Museo Sacro inv. 60313)



トラディティオ・レーギス Traditio Legis (律法の授与図) 一部

この断片では、中央のキリストの光背、左肩と左腕にもつ開いた巻物
(*LEX DOMINI*) とそれをうやうやしく受け取るペテロの上半身、
さらにその両者の間に円に内包されたキーロー・モノグラムがみえる。

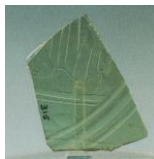
8

それでは、このポルトゥスのバシリカから発見された断片 1 についてみてみますと、中央のキリストの左肩と頭部の光背の一部、開いた巻物を渡す左手、*LEX DOMINI*と書かれた巻物、その上の円に囲まれたキーロー・モノグラムとAの文字、巻物をうやうやしく受け取る姿勢を取る顎鬚のない短い髪のペトロの上半身がみてとれます。この図ではペトロが両手でパリュムの裾を広げて律法を手で直接触れないように受け取る準備をしているため、長い十字架を抱えていない。なお、キリスト、ペトロ共に、その襷の寄った衣服は、彫刻的な彫り方の特徴を示しています。

ポルトゥス、ポルトゥスのバシリカ出土の浅碗断片 2



Disegno da prof.ssa Sagui?



律法の授与図? のカット装飾付き断片
無色透明、17.1cm×10.5cm×0.35cm
4世紀末-5世紀初頭
Portus, Xenodochio di Pammachio出土
Musei Vaticani (Museo Sacro inv. 60314-60315)

39

続いて断片 2 についてです。この断片は、二断片を接合したことによって浅碗の左半分近くが残り、おそらくその右下にあたるだろう小片も併せて確認されています。中央のキリストは、顔の部分から欠けてしまっていますが、顎鬚があり、巻き毛で肩までかかる長い髪に光背を有していたことなどの特徴は、かろうじて確認できます。またその姿は正面向きで、二大使徒より大きく描かれていたこともわかります。右手でパウロを祝福し、その肩にはキーローモノグラムがみられます。高く掲げたキリストの右手の4本指部分は、一番内側の円枠の研磨で共に削られてしまっています。その右手の下のパウロは、先のペテロのようにパリウムの裾を両手で広げ、まるで何かを受け取るかのようなポーズを取っています。髪は短くキリストと同じ小さな円の面カットで巻き毛が描かれ、顎鬚はなく、光背を有しています。パウロは、低い脚台のような上に立っています。パウロの背後には、棕櫚の木というには細い弱弱しい一本の木が生えています。同様な脚台は、おそらく反対側のペテロが立っていたであろう足元の断片にもみられます。

アルモイナ（スペイン）出土のカットガラス碗断片

Stilgruppe A – plastisch wirkende Figuren



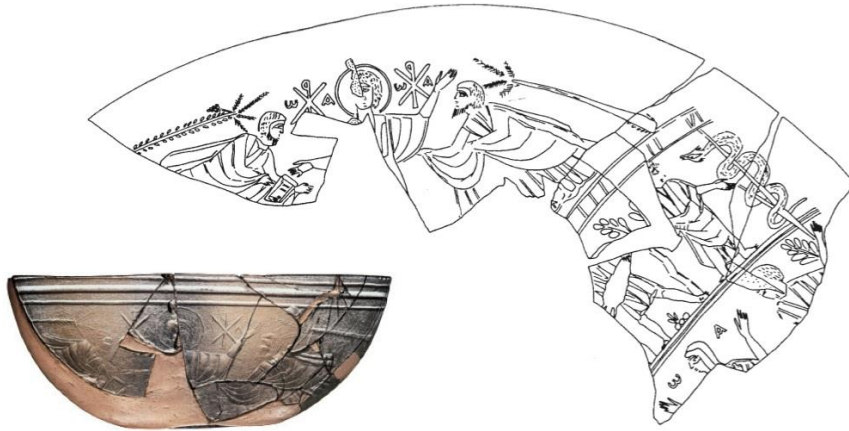
Almoyna (Valencia)



キリスト教的カット・ガラス碗
淡青透明
アルモイナ（ヴァレンシア）出土
4世紀後半
Museu de Prehistoria de
Valencia所蔵

同じローマの工房製と思われる、律法の授与図を含む彫刻的なカットが施された半球状の碗は、スペインのアルモイナから出土しています。

アルモニア（スペイン）出土のカットガラス碗断片



[Museu de Prehistòria de València - El bol de vidre de l'Almoina \(València\) | Facebook](#)

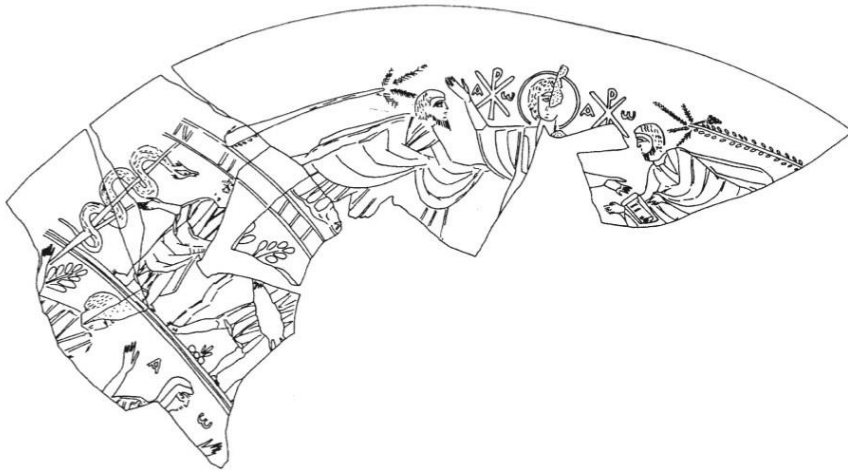
Almoina (Valencia)

Benito GOERLICH, "El primer cristianismo en la ciudad. La figura de San Vicente Mártir", en Jorge HERMOSILLA PLA, La ciudad de Valencia. Historia, geografía y arte en la ciudad de Valencia II; Valencia, Universitat de Valencia, 2009, 276-277.

41

発表されている書き起こし図は、その構図を碗の内側からではなく、外側から描いているため、左右反転してみてください。

書き起こし図反転版



Almoyna (Valencia)

Benito GOERLICH, "El primer cristianismo en la ciudad. La figura de San Vicente Mártir", en Jorge HERMOSILLA PLA, La ciudad de Valencia. Historia, geografía y arte en la ciudad de Valencia II; Valencia, Universitat de Valencia, 2009, 276-277.

42

これまでみた図像と異なり、碗の内部は複数段に分割されています。欠損箇所から鑑みて、おそらく半月状の広い場面が碗の上下に配され、その間の直径に近い幅広の部分に聖書場面が二段に配されたと想像されます。欠損箇所が多いため、一番上の半月状の場面と、下二段の左側のみが残っています。一番上の装飾帯には、ポルトウス出土の断片 2 に類似した律法の授与図が占めます。中央に光背を有する短い髪で顎鬚のないキリストが立ち、その頭部の両側にはアルファとオメガを伴うキーロー・モノグラムが配されています。二大使徒はいずれも短い髪に顎鬚を有し、右下のペトロはすでに巻物を受け取っていて、キリストの左手から巻物は離れています。左下のパウロは、ポルトウス出土の断片 2 に似て、パリウムを両手で広げるように掲げています。両者の背後には、細い棕櫚の木が見えます。その下の段には、杖に巻き付いた大きな蛇を前にしたパリウムを着た人物像があり、さらにその下の段には祈りの姿勢で両手を広げたオランス像の女性像とその左の男性像の一部が見えます。これらは発表者には、旧約聖書的な場面、蛇に毒を盛るダニエル、長老とスザンナの可能性があるように思われます。

オーベルンブルク（ドイツ）出土のカットガラス碗断片



[glasschale-flyer_web.pdf\(obernburg.de\)](http://glasschale-flyer_web.pdf(obernburg.de))

Stilgruppe A – plastisch wirkende Figuren



Abb. 159 Fundorte von Glasern der Stilgruppe A. © S. Nagel

律法の授与図のカット装飾付き碗断片

淡緑透明、D: 25.8cm

4世紀末–5世紀初頭

Obernburg

(ローマ時代の要塞—リメス出土)

Archäologische Staatssammlung
München, Inv.Nr. E 1996/47

グループA：陰刻

もう一つ、彫刻的なローマ工房の類例で、同様な律法の授与図がカットされたものは、ドイツのオーベルンブルクから出土しています。



Archäologische Staatssammlung München, Inv.Nr. E 1996/47

こちら、先のアルモニア出土の断片のように、碗が複数の段に分割されています。一番上の大きな半月状の空間には、正面向きの、肩までかかる長い髪で顎髭のないキリストが中央に立っています。頭には光背と、その右の空間にキーロー・モノグラムが配されています。ここで、一見これまでと同じ律法の授与図にみえますが、左下にはパウロではなくペテロが控え、すでに巻物を手にし、欠損部分を補った書き起こし図で、右下に控えるパウロが律法を授与される瞬間が描かれていると想定されています。また、二大使徒のそれぞれ手前には、巻物を詰めたカプサがあったと解釈されています。さらには、それぞれの人物像の上に名前が降られています。欠損していますが、左からPETRVS、SALBATOR、PAVRVSとあります。VがBとなっていますが、キリストを救世主として記しています。二段目は新約聖書、三段目は旧約聖書と解釈され、二段目には中風患者の癒しと岩うつペトロの奇跡場面、三段目にはイサクの犠牲が描かれていたと想定されています。



本日のまとめ

→ローマの港町、オスティアとポルトゥスで、どのようなガラス製品が使用されていたのか、サグイやレプリラによって、紀元前1世紀から6世紀にかけて光が当てられた。今後も、サグイによるオスティア遺跡の未公表ガラス発掘品などが、両名の名で公表される予定。

→オスティアとポルトゥスでは、2世紀～3世紀頃のガラスの二次工房を示唆する遺物が確認され、またオスティアの市場付近では、ローマのクリプタ・バルビで確認されたものと構造的にも似た5世紀の窯址も発見。

→オスティアとポルトゥスから出土したキリスト教的カット・ガラスの断片は、4世紀後半から5世紀初頭の「彫刻的な印象をあたえる広い面が深く碗の外側からカットされた」グループに属し、衣服の襞の立体的表現や、ややより目とも取れるアーモンド形の目、一本筋の通った線の鼻、二本の短い線で表現される口などの特徴を有する。

→「彫刻的な印象をあたえる広い面が深く碗の外側からカットされた」グループは、ローマで多数出土しており、ローマに工房があったものと思われる（なお、本発表では触れなかったが、同工房は、伝統的な神話的場面や異教的主題も扱っている）。

→オスティアとポルトゥスから出土したキリスト教的カット・ガラスの断片は、4世紀半ば頃に誕生した「律法の授与図」や、「勝利のキリスト」もしくは「殉教者ラウレンティウス」の図像を有する。

→同じ工房製で同様な主題を有したガラス碗断片がフランスやスペイン、ドイツなどにもその類例が分布していることかた、ローマ/オスティアのガラス製品は、東方よりも西方との流通が盛んだった可能性がある？（この傾向は3～4世紀のプテオリヤバイアエの景観カット付き球状フラスコ瓶にもみられる）

謝辞：ルチア・サグイ先生と恩師豊田浩志先生に
発表に関する様々なご助言、ご指導をいただいたことを感謝します。

ご清聴ありがとうございました